日本庭園学会ニュース
The Academic Society of Japanese Garden News

ＮＯ．８７
平　成２８年

平成 28 年度 日本庭園学会関西大会 案 内

発行　日本庭園学会（会長 鈴木久男）
〒 156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1
東京農業大学 地域環境学部 造園科学科
ガーデンデザイン研究室内
TEl(03)-5477-2430(鈴木誠研究室)
http://wwwsoc.nii.ac.jp/asjg/

平成 28 年度　日本庭園学会関西大会　案 内

平成 28 年度の関西大会は、平成 28 年 11 月 5 日（土）・6 日（日）の 2 日間、京都市内で開催する。

1 日目の 11 月 5 日（土）は、現地検討会として午前に旧三井家下鴨別邸の見学を、午後に鹿苑寺（金閣寺）と等持院の見学を行う。旧三井家下鴨別邸(重要文化財)の庭園は 10 月に初めて公開される近代庭園である。鹿苑寺では、西園寺家の北山殿時代の遺構と思われる滝への導水路が新たに確認されたことから、これを巡って現地で討論する。等持院の庭は平成 27 年度に新しく京都市の指定名勝となった。

2 日目の 11 月 6 日は、京都産業大学むすびわざ館（京都市下京区）を会場として、終日研究発表会を行う。

◆研究発表の申し込みについて

研究発表会での発表希望者は、下記の要領にしたがって申し込むこと。発表時間は、ひとりあたり 25 分とし、発表 20 分、質疑応答 5 分を予定している（但し、発表者数によって変更する場合がある）。発表には PC プロジェクターの使用が可能。

◆発表申込み方法

発表者氏名・所属・題名・連絡先を明記し、発表概要(200 字程度）を添付のうえ下記の「発表申込先」まで送付すること。原則的には E メールとするが、郵送もしくは FAX でもかまわない。電話での問い合わせには応じられないので注意のこと。

提出期限 ：平成 28 年 9 月 18 日（日）必着

E メールでの送付の場合は、同日 23：59 までとする。

◆発表要旨　執筆要領

全発表者分を研究発表要旨集として印刷し、当日参加者に配布する。原稿はそのまま要旨集の版下とするため、ワープロを使用して作成することが望ましい。分量は、A4 判で 2 ページもしくは 4 ページ、6 ページとする（奇数ページでの原稿は、受け付けないので注意すること)。プリントアウトを下記の「発表申込先」まで送付すること。郵送を原則とする。1 ページあたりの文字数及びページレイアウトは、学会誌の論文の書式に準じ、横書き 2 段組、1 段あたり 25 字 40 行となっている。なお、書式は日本庭園学会ホームページからダウンロードが可能となっている。申し込みと資料提出の締め切り日は厳守のこと。

提出期限：平成 28 年 10 月 16 日（日）必着

◆発表の申込み先・要旨集版下原稿の送付先

〒 606-8271
京都市左京区北白川瓜生山 2－116
京都造形芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター気付
日本庭園学会関西支部事務局
(担当者：関西支部長　仲　隆裕)
ファクシミリ：075 － 791 － 9127
E-mail:naka@kuad.kyoto-art.ac.jp

■

報　告
日本庭園学会 2016 年全国大会（足利）
庭園検討会

森　泰規
株式会社 博報堂
ブランド・イノベーションデザイン局

本大会の二日目午前をかけて行われた検討会の構成を安易に要約すると＜史跡としての庭と、生活の場の庭との対置＞などとなるだろう。しかしこのように要約してしまえば、記録はわずかのことしか語ってくれない。

むしろこの実地研修は、今回の二日目シンポジウムで取り上げられた「文化財庭園」というものについて、大きな示唆を与えるという点で白眉であった。新藤家の庭園は、まぎれもない「文化財」でありながら、同時に実生活の場でもあるという構造が十分に成り立ちうることを示す例だ。そのようにとらえると、この件は個別の事象でありながら普遍的な主題への類推を誘うものとなるだろう。たとえば、「実生活の主体が失われるときの対処」とみれば、新潟の旧・斎藤家別邸の事案を連想するし、何よりも実生活の中で本来の真価を発揮するという点では、京都の町家建築における坪庭の事案を思い起こさせることがある。足利家関連の庭園は当時の人々にとって政務の舞台であった以上それは＜過去における実生活の場＞であったと考えてもよいのだろう。ゆえ、ここでの本質は＜庭とは生活の場である＞と判じる類推の魔をお許しいただきたい。既存の学問区分に立脚しようとすると、このような考察の自由は禁じられるのかもしれない。しかし筆者はそのシステムの外にいる。

さて筆者が何かを学ぶときにいつも念頭においていることがある。入社して間もない頃、業務上指導を得ていた作曲家が　――　内外の舞台・放送で自作上演が多く、名前を挙げれば多くの方が知っていると思う　――「森君、ぼくはまだオペラを見始めたばかりだ」と言うので驚いた。これは別に、数をみなくていいとの意図ではない。仮に何作みても、「まだ見始めたばかりだ」と思って接していればそのつど新しい本質的発見がある、ということだ。それ以来筆者は、或る程度詳しくなった領域についてでも「まだ見始めたばかりだ」と思うことにしている。およそ物事の見識には知識の量的蓄積と同時に個々の洞察の深さや斬新さも求められるからだ。その点庭をみるのと、その本質をみるのは少し違うのかもしれない。また現地見学会の後、その考察を語り合う場面などはもっとあってよいのかもしれない。

さて文字通り庭を見始めたばかりの筆者にとっては、当学会で出会う庭、ともにその体験を共有できる会員組織は得がたい価値を有する。今回新しい方、お一人おひとりとの貴重な出会いを得た。また、以前お会いした方からも重ねて交流するごとに新しい発見・共有があることにも新鮮な感動がある。筆者にとって当大会での経験はかけがえのないひとときであり、実はもう次回以降どんな演奏実演をするか考え始めているほどだ。

貴重な機会を得たことに、あらためて、足利大会運営担当の大澤様、関係の皆様に謝意を表したい。

■

全国大会総会

全国大会シンポジウム

レポート
2016年　日本庭園学会　全国大会（足利）現地検討会

阪上富男
植彌加藤造園 株式会社

平成28年6月12日（日）の午前に、史跡樺崎寺跡庭園、巖華園、新藤氏庭園に おいて現地検討会が行われた。バスを使用しての庭園巡りで、満員御礼の札が出されるほどの盛況であった。多くの方と素晴らしい庭園を目の前にしての語り合いができる機会を設けていただいたことは有り難いことである。

史跡樺崎寺跡庭園は1189（文治5）年の奥州合戦の勝利後に源姓足利氏二代目足 利義兼が造営し、南北朝から室町時代に改修された浄土庭園である。昭和59年からの発掘調査により平成13年に国の史跡に指定された発掘庭園である。当時は生活の身近に死があった末法の時代であり、背後に控えている山や周囲の景観など、その場所性やそこに漂う空気感などから、庭園が作られる際に込められた現代とは比べ物にならないほどの生への執着を感じたのは、私だけではないであろう。

現在は復元の途中であり、実際に携わっている人々から想いのこもった苦労話を聞かせていただいた。遺構面を保護する2層は用途別に骨材や配合が違うこと、洲浜の修復に使う礫は発掘されたものと似た石をひとつ一つ集めていること、それをひとつ一つを手作業でたたき込むことなど、復元と同時に新たな想いが込められているように感じた。

足利氏の流れをくむ、15代続く中島家が所有する巖華園は平成18年、国名勝に登録された。10代休造の時に山水画を手本として作られ、江戸後期の文人・墨客の訪れ遊ぶものが絶えなかったという。岩の端で岩の飛び出た様子を表す「岩花」を由来とし、山からの出張りを仮山（中国庭園における築山）として作られた石組は、「巖華園」の扁額が掛かる門を潜り、歩みを進めると木々の間から芝生越しに見えてくる。離れた位置から眺めてもその石組は豪快である。現地検討会で庭園に携わる者が集いその景色を語り合ったように、当時もまた文人たちが集い語り合ったのだろうと少し空想に耽ってしまう。

平成28年3月1日に国の名勝に登録された新藤氏庭園もまた、その豪快且つ繊細な姿に感嘆の声が漏れた。入口では3種類の石で作られた外塀から誘われ、庭園においては深く掘り下げられた骨格もさることながら、護岸は川石、石組はチャートを主体として黒ボク石、流れは大ぶりの玉砂利を主体として所々に赤や青の石が配される拘りが随所にみられた。手入れが行き届かず「昔あった庭園の良さがなくなった」と施主様が仰った状態であったとはいえ、本庭園にはじめて訪れた外丸氏が感嘆の声を上げたことは頷ける。荒れ放題であった庭の復元に腐心した外丸氏のご尽力によって「昔の庭園の面持ちが現れた」というお母さま。車椅子のお父様との「約束だった」と、皆で車椅子を担ぎ、タンクに水を貯めて実施した滝の流水試験。解体する計画にあった本庭園が現在に至った物語に触れたことは、温かい心持であった。普段使いでおもてなしをいただいた120年の九谷焼の茶碗が、この庭園と生活をしている人の奥深さを物語っていた。

この素晴らしい日を頂戴したこと、運営担当の大澤様、関係の皆様に感謝申し上げます。

■

現地検討会集合写真　史跡樺崎寺跡庭園にて

関西支部研究会「文化財庭園の修復と考古学」

主催：日本庭園学会関西支部
世界考古学会議・日本学術会議・京都文化博物館

庭園は、自然と人と時間とが生み出す空間芸術といえるでしょう。人は自然をモチーフとして、さまざまな庭園を作り出してきました。

京都には数多くの文化財庭園がありますが、大地の上に作られ、石や水・植物といった自然素材で構成される庭園は、時を経て変容し、また戦乱や災害で被害を受けることもしばしばです。庭園の文化財的価値を損なわないように保存し、また修理・修復するには、精密な考古学的調査が不可欠といえます。

日本庭園学会関西支部では、世界考古学会議が京都で開催されるこの機会に、文化財庭園の修復と考古学に関する講演会を企画いたしました。考古学的調査によって新たに地中から見出された数々の庭園や、文化財庭園の考古学的調査で解明された新事実、調査成果に基づく歴史的景観の整備、さらに歴史まちづくりへの展開など、第一線で活躍する講師によって紹介いたします。

なお、本講演会に先立ち、建仁寺両足院において 8 月 31 日 9 時から 12 時まで、京都府指定名勝両足院庭園の見学会と現在進められつつある文化財庭園の修復工事に関するワークショップを開催しますので、こちらにもご参加願います。（詳細につきましては、後日、当学会のホームページでお知らせいたします）

日　時：平成 28 年 9 月 1 日（木）　13 時 30 分から 16 時 30 分
場　所：京都文化博物館　別館（京都市中京区三条高倉）
参加費：無料（希望者には講演資料を有償頒布いたします）
　　事前の申し込みは不要です。
プログラム（予定）
　趣旨説明
　　仲　隆裕　（日本庭園学会関西支部長・京都造形芸術大学教授）
　講演①　庭園の考古学－平安京と発掘庭園―
　　鈴木　久男（日本庭園学会会長、京都産業大学教授）
　講演②　京都市内の文化財庭園の修理と考古学的調査との相互関係
　　今江　秀史（京都市文化市民局文化財保護課、大阪大学大学院）
　講演③　名勝庭園における歴史的景観の表現方法と諸課題
　　吹田　直子（京都府教育庁文化財保護課）
　講演④　宇治の歴史まちづくりと考古学
　　杉本　宏　（宇治市歴史まちづくり推進課）

■

【会費納入のお願い】

学会費の納入額をご確認のうえ、納入のほどよろしくお願いします。また、過年度滞納の方は併せて納入のほどよろしくお願いします。■

協力者：山本 千晶（植彌加藤造園株式会社）

日本庭園学会広報委員会
今江秀史、加藤友規
〒 606-8271 京都市左京区北白川瓜生山 2-116
京都造形芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター気付
日本庭園学会関西支部事務局　FAX(075)791-9342